
【最強系（笑）】俺の異世界冒険譚【最低系（笑）】

あおたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【最強系（笑）】俺の異世界冒険譚【最低系（笑）】

【Zコード】

Z5878M

【作者名】

あおたん

【あらすじ】

神様に呼ばれて異世界召還！

ファンタジー中世ヨーロッパ風とか鉄板すぐる

若干の手違いはあつたものの、無事、チート人生始められそうだぜ！

ハーレムしつつ、最強系で最低系の主人公やってやんよ！

つてあれ、なんかおかしくね……？
俺の冒険どうなるの！？

妄想があふれ出た時だけ投稿なので、不定期必至です。
草（＼＼）が大量に生えたりするタイプの小説ですので、あらかじめ
ご了承ください。

プロローグ【夢だと醒つてたら】俺は「ひじて、異世界に旅立つひにならま

俺の妄想があふれ出た

18禁になると描画が面倒なので、R15レベルで

プロローグ【夢だと思つてたら】俺は「ひじして、異世界に旅立つ」になら

ん、なんか頭がふわふわしてる。

ここはどこだろ？

目の前には天使が一人と、その周りには球体の何か。
それ以外は、あたり一面真っ白だ。

「

天使が何か言つた様だが、俺の頭が回つてないせいか、理解できなかつた。

どうも、頭がすつきりしない。

周りがぼやけて見えるというよりは、寝起きの状態に近い感じ。

「

まだ、天使が何か言つていいようだ。

俺はそれを右から左に聞き流しながら、ゆっくりと意識を取り戻していく。

そんな俺の頭の中で、今現在分かっていることは三つ。

- ・意識はある（ようやく戻ってきた）

- ・ここは見たことない（なんか真っ白な空間。周りに球体が「ひじいろ落ちてる）

・目の前には美人の天使

そうして俺が出した結論は簡単だつた。

これ夢じゃね?

しかもあれじやね、夢だと分かってる夢つていつやつ。
何回か経験したことあるし、なんかそれっぽい気がする。
ちなみに前回の経験は、

俺^{アタマ} 惡代官^{アタマ}
相手^{アタマ} 村娘^{アタマ}

とかでした

おとつあえずあれだ。

俺、これから目の前の天使さんとボーナスステージの時間ですか？
好きにしてもいいんですねつをk

! !

うそりん、天使君、最早君は我が手中にあるのだよ、諦めたまえ！
おじちゃんがいっぱい可愛がってあげるからね、うひひひひ

「…………」

天使がなんか叫んでいるが、これはきっともう「リッシュチュなんだろ
う。

割とはつきり聞き取れるのに、何言つてるかわからないしな。

それじゃあ早速

いただきまー————す————！

「えつとなこ、つまりこには神の世界で現実つてこと?」

「ええ、じ主様の感覺ですと、そのよつに思われて間違いないと思われます」

今現在、俺は天使、といつか天使の格好をした神（自称）のルナに事情を聞いていた。

といつのも、延々数時間好き放題し、その後のスーパー賢者モードに入ったとき、俺はふと疑問を持ったのだ。

一つ、夢ってこんなに長々と続くものだつたつけ?

一つ、夢を夢と認識できる夢といつても、ここ今まで明確な意識とか持つてられたつけ?

一つ、童貞の俺が、何であそこまでリアルな感触を味わえたの? 等など。まあ、細かいといつままで挙げればきりがないが、そんな感じに疑問を持ったのだ。

とりあえず現状認識しようと思つて、周りを見てみると、球体の何かが落ちたのでそれを覗いてみたら何とびっくり。

中に世界があるんだけど。

しかも、なんか俺がいたような世界なんだけど。

え、あれ、もしかしてこいつて、上位世界的な何かですか?とか思

つたんで、他の球体を見てみたら、出るわ出るわ。

SFTっぽいのから、ファンタジーっぽいの、はたまたなんか良く分からぬクトゥルフっぽいのまで。

ついでに、俺の言語じゅ言い表せないものなんかもあつたわ。

多分あれは、確実に別の原理原則が働いてるね、間違いない。

あれ、もしかして俺、夢だと想つてやめさせられたんじゃね？

場合によつては、あの言葉では言い表せない世界とかに飛ばされますか？

あるいは、地獄すら生ぬるいとか言われそつな世界に飛ばされますか？

それとも、Jリで存在から消滅とかでせつが……？

そう思つてゐると、天使がちよつと起きてきたわけだ。

「んつ……」とか、色っぽい声あげながら。
さすがに焦つたね。ちょー焦つたね。

焦つてビリにかしょうと思つたけど、Jリじゅビリも出来ないことに直ぐ気付いたけど、でもやつぱりどうにかしたくて。
とか考えてもやつぱりいい考えが浮かばなくて。

だけど、そんな俺のこと気に付いた天使の第一声が俺に光をくれま

したよ。

「『』主人様、どうされたんですか？」

つてね。

……夢だと思つて好き放題してたなかで、なんだ、まあ、そういう風に調きょげふんげふんしたのが幸いしたのか。どうも天使の中で、俺と天使の位置関係が

俺 = ご主人様

天使 = 奴隸

というのが確定しているっぽい。

つまりところ、このままの関係でいれば俺がピンチになることもないわけだ。

そこでようやく冒頭に戻る。

情報を持たないことにはどうしようもないから、俺は内心びくびくしながらも、偉そうに天使に色々聞いてみるとこにしたのだ。

その中で分かつたのは以下の通り

- ・天使は、俺の世界で言うところの神みたいなもので、名前はルナつていうらしい。

- ・俺のいた世界は、あの球体の中にあり、ルナが観測して暇を潰すために作ったものらしい。

・その辺に転がってるのも全部同じようなもので、それぞれ別の世界らしい。

・俺がここにいるのは、どこか別の世界に放り込んで、その中でふたするのを見て楽しむためだつた。

・ちなみに召還当初喋っていたのは、俺には理解できない言葉みたいなものだつたらしい。ルナはドジッコ。

あれの過程で気付いて、俺にも分かるよつに変えたりしげ。

簡単に言えば、以上である。

転生テンプレート言わざるをえない。
正直バツチコーキですけどね、ええ。

「で、これからどうすんの？」

「えつと、あの、『主人様はどうされたいですか？元の世界に戻すことも可能で』

「ファンタジーの世界に飛ばしてくれ！」

「ひゃーい！」

どうしたいとか聞かれたから、即答しちやつたよH A H A H A！

俺のあまりの勢いにルナは驚いていたみたいだが、しょうがなくね？
だって、異世界にいけるんだぜ？

しかも、異世界に飛ばす神が俺のいいなりだから、俺の思い通りなんだぜ？

行くしかなくね？

ていうか、ここでノロつて答える奴は、リア充だ。モゲロ。

「えっと、仕様というか、世界観というか、そういうのはどうしまですか？」

「中世ヨーロッパ風味の剣と魔法の世界。

俺の容姿はトトリのアトリエのステルクで。ただし、年齢は18あたり。

ヒロインの一人にシェツイっぽい容姿の子ヨロ。

後はあれだ、俺に都合がいいように適当に」

神様だし、とりあえずこれだけ言つておけば十分だろう。

きっと、俺の頭の中とか覗いて、ばっちらりやつてくれるに違いない。ちなみにトトリのアトリエはプレイとかしてないけど、画像だけ持つてる。

シェツイの可愛さは異常。異論反論は認めない。

「はい、準備が出来ました、ご主人様」

「お、早いな。んじゃ早速頼むわ」

俺がちょっとシェツイと脳内で戯れてる間に準備が出来たらしい。なんか早すぎる気もするが、そこはあれか。神だし俺の常識とか通用しないんだろう。

「それでは、」主人様、いつてらっしゃいませ

ルナのいい笑顔を見ながら、俺の意識がブラックアウトしていく。
ていうか、笑顔が良すぎて逆に怖いんだけど、信じていいんですよ
ね！？

こうして、俺の異世界冒険譚は始まった。

1【王道】チート人生始まるよー【テンプレ】

「知らない天井だ」

とりあえず、気付いた時ベッドで寝てたので、テンプレに沿つて言つてみた。

「田が覚めましたか?」

と思つたら、人に聞かれてたでござるー。
え、やべつ、はずかしいんだけど。

つて思つたけど、よく考えたら、ネタだと知らない人なら恥ずかしくないことに気付いた。

とりあえず、声のした方を見る。

そこにいたのは、腰まで伸びる青い髪を持つた少女だつた。
なんていうか、『とある魔術の禁書田録』のインデックスをもうち
よつと清楚にした感じ。

いや、あれも一応清楚なはずなんだが……そこはおいておいて。
着ている服は、一般市民のそれっぽいが、汚らしさは無い。
それ以外に俺が言えるのは、今まで見たことないぐらいの美少女
であるということだけである。

સાહેબની પત્રો - ૧

いよいよ、ルカ君は最高だ！

わがこてる、わがこてるじゃないか！

最初はやつぱりうじやなきやダメだよね。

僕れでいる俺を見つけて、お手に取られる美少女。

迷宮のノハ

ルナを後で褒めてやらねばなるまい。

「あの、大丈夫ですか……？」

おつど、紳士たる俺としたことが興奮して、美女の相手をするのを忘れるとは。

「ああ、大丈つ……」

大丈夫って言いながら起き上がりうつしたら、ふらつときただで「」ぜる。

貧血とかそんな感じ。

「あっ、ダメですよ。いきなり起き上がつては、ずっと寝てたんですから」

そーなのか。

しかたないので、無理をせずベッドに倒れこむ。
つか、ベッドかてえ。

でもそこまで不快に感じないのは、俺の体がこの世界に適応しているからなのかもしれません。

適応してるのは肉体だけなのか、精神も適応してるのか。
精神も適応してるなら、生き物殺してもなんとも思わなかつたりするんだろうか。

まあとりあえず、喉渴いたせいだ。

「じめん、水か何か貰つていいかな。少し喉が渴いてる」

「分かりました、直ぐにお持ちしますね」

そう言って部屋を出て行く美少女。

扉を閉めると、続いて階段を下りる音が聞こえてきた。
この家、一階建て以上なのか。中世ヨーロッパ風のはずだが、中々
リツチな家のかもしれません。

そんなことを思いながら、体を動かしてみる。少し動かしてみた感じ、違和感とかは特に無い。

部屋に鏡が無いので容姿は現時点ではよくわからんが、ルナならきっと何とかしてくれているはず。

つまりイケメン（笑）しかも能力はチート（笑）

そう思った時、瞬間脳裏にステータス画面と思わしきものが現れた。

例えるなら、妄想がMAXレベルで行われた時の明確さとでも言つべきか。

自分で思つておいであれだが、その例えはねーわｗｗｗｗｗｗｗｗ
もう一度最初から見直す。
すると、HPやマナの部分で一度目を止め、絶望を味わいながら、再びステータス欄に目を向けた。
そこには、過酷なまでの現実だった。

「H A H A H A ! …… 見間違いだよな、セニヨリーダ

Agoi 1 / 99

Dex 1 / 99

Vit 1 / 99

Int 1 / 99

俺終了のお知らせ。

初期分配用のポイントは無いようである。

つか、これ幼児なみのステなんじやね？

ルナ出てコイヤゴラア…………!
とか強く思つてみたけど、何も起こらなかつた。
とりあえず、思いつく限りの罵詈雑言を思い浮かべてみる。
語彙が少なすぎて全然思いつかなかつたが、ルナは反応しなかつた。

10 of 10

「とりあえず言いたい事言つたので、落ち着いてきた。」そこで俺は、とある単語を思い出す。

暇潰し

「そういえば、俺が異世界に飛ばされる理由は、当初、『暇潰し』だった。」

それを前提に考えると、なんか色々納得してしまつのだ。

神の世界の時点から、俺を騙していたのでは無いか。という仮説。
上げるだけ上げてから落とした方が、面白いという真実。

俺が惨めに生きていくのが楽しみだと言つていた。
俺に襲われたのだつて、よくよく考えればおかしくない。

俺は襲われたのだから、よくよく考えればおかしそうな笑顔。どう考へても不自然でした。

つまり、IJKで俺を絶望させるのが目的だったということだなHA

H A H A

o r z

なんてこいつたい……

だがしかし、OK、百万歩位譲つてステが初期値、それはいい。
弱い状態からスタートなんてのは、RPGで考えれば常識だ。

だから、そこは目をつむるわ。

だけど、だけど、お願ひだ、ルナよ。

ただ一点でいい。ただ一点だけ俺のわがままを通してこてくれ。

どうか、イケメンであつまよひ。

Name : リョウ

称号 : 記憶を失ったヘタれ

HP : 15 / 15

マナ : 0 / 0 (0)

ステータス

Str 1 / 99

Agi 1 / 99

Dex 1 / 99

Vit 1 / 99

Int 1 / 99

ユニークスキル

- ・人生の選択

- ・どのような人生を送るか、設定できる。

- ・本人の意思にかかわらず、数値に応じた人生になる。

- ・数字が大きいほど高い。1～5で変動。最大5

- シリアルス 5（固定）

- エロス 1（固定）

- ・真実の目

- ・自己及び他人のステータスを、ある程度の範囲で確認することが出来る

- スキル

- ・無し

1【王道】チート人生始まるよー【トランプレー】（後書き）

うまく書をきれてないなあ
ステとか色々は、文中でなるべく説明しますので、地球一周する位
首を長くしてお待ちください

2【人生】俺の物語が始まったと思ったら、終了が確定していた【オワタ】（前）

0・1を投稿したのが確か午前4時とかなのに、お気に入り登録4件とか……

おまえら、マジ愛してるｗｗｗｗｗｗｗ
おかげでパワーが湧いてきたよ！

2【人生】俺の物語が始まったと思ったら、終了が確定していた【オワタ】

そうやって俺が悩み悶えていたと、ノックの音とともに扉が開かれ
る音がある。

ノックしておいて、返事を聞く前に扉を開けるとか意味なくね?と思
いつつ、扉に目を向けるとおっさんだった。

おっさんはおっさんでも、ダンディーかつマッチョなおっさんだっ
た。

髪はブラウン。

しかも、威圧感というか、偉そうなオーラ的な何かが出ている。

何もんだよ、このおっさん。俺がそう思った時、やはり勝手にステ
ータス画面が現れた。

Name・ラルフ・サンダース

HP : 1518 / 1518

マナ : 738 / 738 (2)

ステータス

Str 35 / 99

Ago-1 25 / 99

Dex 27 / 99

Vit 34 / 99

Int 29 / 99

この世界の人間の標準が分からんが、このおっさんはきっと強い気がする。

つか、この威圧感というかオーラっぽいのがあって弱いとかだったら、この世界怖すぎるわｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

しかし、自分の見た時と違つて色々足りないな。

称号・ユニークスキル・スキル、この三つがこのおっさんは見えない。

ステータスより、そっちの方が重要なんだろ？

「調子はどうだ？」

そんなこと考えてたら、おっさんに話しかけられたでござる。

おっさんの口調はいかめしいが、一応心配してくれてるのはなんとなく分かる。

もちろん、信用されてるわけではないみたいだが。

「ああ、悪くない」

ちよ、俺自重しろｗｗｗｗｗｗｗ

なんでタメ語なんだよｗｗｗｗｗｗｗ

ステの差考えたら、余裕で丁寧語の上へりくだるべきだろｗｗｗ

ｗｗｗｗ

そうじゃなくても助けてくれた相手なのに、俺さん、なにやつてる
んすかｗｗｗ

「記憶はあるか？」

おっさんは特に気にしないとこう風に話を続けてきた。

さすがです、こんな俺相手でも、きちんと相手してくれるなんて。

つか

「記憶……？」

なんで俺の記憶が無い（つていつ設定になつてる）ことを知つてんだ？

言った覚えとかないんだが……。

起きてからの俺の言動？それとも保護された時の状態？
なんかやつたのか……？

「私のユニークスキルは、対象の状態等を知ることが出来るもので
な、それでわかつたんだ」

はい、口に出してない疑問にお答えいただきありがとうございます。

つーか、心読むな wwwww

そしてあれでしょ、俺のステで記憶云々って称号の所でしょ？

『記憶を失ったへたれ』でしょ？

うは wwwwwwwf を k wwwwwwww
かっこわるす wwwwwwww

そして、俺の持つてる『真実の目』のようなステ確認系スキルって、
もしかしたらレアなんじやないかなあ……とか思つてたのに、
ごくごく普通にあるのかよ wwwwwwww
へ wwwwwwc wwwwwwmu wwwwwwwwwwww
しかも、このおっさんは俺の称号を確認できて、俺はこのおっさん
の称号確認できんんだろう。

つまり、俺の『真実の目』の方が下位なんだろう？

……へこむわ orz

「記憶が無い状態で聞くのも酷だとは思うが、これからにも事情があつてな。今後の身の振り方を聞いておきたい」

俺が一人で悶えてたのを、記憶が無ことこのことに気が付いて愕然としていた的に捉えてくれたんだろう。

おっさんが、割とすまなそうに聞いてきた。

つーか、どうしたいとか聞かれても、答えなんて決まってるんだが。

「しばりぐー、ここに置いてくれない？」

美少女いたし。俺のステ低すぎワロスだし。美少女いたし。この世界の常識知るまで外とか怖くて行きたくないし。

美少女いたし。おっさん多分強いっぽいから、戦闘の仕方教えて欲しいし。美少女いたし。

まあ結論として、美少女がいるから俺はここに残りたいということなんだが。

おっさんは若干渋い表情を見せたものの、どうせはじめから結論なんて決まってたんだろ？
了承してくれた。

そうして話が一段落付いた所で、扉をノックする音が聞こえる。

「失礼します、お飲み物をお持ちしました」

そう言いながら、美少女が入ってきた。
手にはお盆と、その上に水差し、そしてコップ。
どうやら、俺の為に水を持ってくれたらしい。感謝。

「キルト。彼はしばらくここで留まるそうだ」

「まあ、やうなんですかっ！」

そう言って、美少女（キルトっておっさんが呼んでた）は、こぼれるような笑みを浮かべる。

「私は、キルト……キルト・ミルファと申します。これからよろしくお願いしますね」

丁寧なお辞儀と、続いて満面の笑み。
ぐはあっ！なんだこれは！

衛生兵！衛生兵を呼んでくれ！破壊力が高すぎると
これが噂の二口ぼなのかつ！？
二口ぼなんだなつ！？
てこうか、ほつさせられたの俺かよ！

そして、二コぼって主人公特権、すなわち俺の特権じゃないんですか、先生っ！？

「ラルフ・サンダースだ。よろしく頼む」

おーけー おっさんありがとう。

おっさんの方に意識が向いたおかげで、俺のテンプレーションが解けたぜ。

二コぼに動搖したが、もう負けない。

今度、お返しにナゲぽなるものをお見舞いしてやるぜ、キルトッ！

「リョウだ。記憶を失つてるので迷惑をかけると思うが、よろしく頼む」

こつして、俺の異世界冒険譚（笑）が始まった……

Name : キルト・ミルニア

HP : 60 / 60

マナ : 50 / 50 (5)

ステータス

Str 4 / 99

Agi 5 / 99

Dex 10 / 99

Vit 4 / 99

Int 23 / 99

③【ヒロゲ麿】「『アザレタ俺がナゾマカラぬ為に頑張るお話【N】（前編）』

今回次回は下準備……

3【エロゲ感】「『起された俺がナトsumeる為に懇張るお話【N】』

「おはようござれ」

そんな声に起されたさわやかな朝、皆様いかがお過しでしょ？

か。
私は今、大変夢見心地であります。

『美少女に、朝起された』これなんてエロゲ？

「おはよー、キルト。それと、起してくれてありがとう」

ありがとうございます、本当にありがとうございます。

君のおかげで、俺の夢が一つ叶ったよ……！

朝食が出来ているところと下に向かう。

朝食はパンとスープ。大変おしゃれでした。
正直もう少し質素な感じかと思ってたんだが、そこまでもないよ
うだ。

なんせスープには具として野菜が結構入っていたし、パンは二つも
貰えたからな！

これがこの世界の平均かどうかはわからないが、少なくともここに
いる間にひもじい思いをしなくて済むところのはありがたい。

「つづくわざと、体調の方はどうですか？」

「まつりだよ、もう問題無い」

実際問題は無い。ただ純粋にステが低いだけで、状態異常などはないらしい。

「やうか。なら今日はキルトの仕事を手伝つてもいいわ

「了解、衣食住の分へらこは働くかね

「コトツさん。よろしくお願ひしますわ」

キルトの顔がキラキラ光つてゐるよつて見えるぜ……。
さすが二口ぽ使い。

可愛すゑておじかこのハートがリリシアブレイクだおーー！

そんなこんなで朝食を終えた俺たちは、瓶を持つて川に向かつてい
た。

「ひこひこひこひこ……」

おっさんは狩りに行くと言つて出かけた。
俺とキルト一人つきり k t k r !

「ひつひつ企ー。ひつひつ企ー」

「リョウさん、大丈夫ですか？」

だいじな.....うつぶね.....」

……うん、瓶がね、すっげー重いのよ。
キルトは『ぐるぐる』普通に持つんですけど、おじさん二つぱー二つぱー
ですよ。

サイス的には、現代日本のボリバケツくらいなんだけれどね、陶器だ
かなんだか細かいことはよくわからんが、とりあえず重い。
STR-1だと、きつときつながらい、重い。

とはいへ、まだ持てたんだ。まだ持てたんだよ、この時までよ……。

「ひんぬいば」一

」
…

いやね、ひーこらいいながら川まで辿り着いて水を入れたら、皆様

ご想像の通り。

まったく持ち上がらなくなりました。テヘッ

俺弱すぎワロタ

いやSTR1なのは知つてたけど、これはひどくね？
そういうや、川に映つた自分の顔はイケメンだったけど、そんなの今
の状態じや気にしてる余裕が無い。

「やつ、病み上がりですからね。持てなくもしょうがありません
よつ！」

フォローあざーす。

とはいえ、僕男の子。

そんなこと言われてしまいますとですね、見栄を張つてしまいたく
なるお年頃なんです。

というわけで、頑張つてみた。

顔を真っ赤にさせつつ、必死に。

そしたらね、持ち上がつたんだよ。いや、まじで。

これが火事場の馬鹿力とでもいうやつなのか。持ち上げた俺がびつ
くりしたわ。

その後、10メートルおき位に休憩を取りつつ、足をブルブルさせ
ながらも必死に運んだ結果、キッチンとみつちゃんコンプリートでき
ました！

みつちゃんつてなんやねん。何故脳内でいい間違えるのか……。
いくら疲れてたって、これはねえだろ、俺www

「それじゃあ、私はもう一度行つてきますので、リョウさんほんじで休んでいてくださいね」

……ぱーどうん？

一人情けない姿をしてぶつ倒れている俺を尻目に、キルトは次の瓶を持つて出かけようとしていた。

そして、その近くにはもう一個空に見える瓶が……。

……おーけー分かった。

もちろん俺も行きますよ。

いくら俺のステが低いからといって、男の子の俺が力仕事で休むわけにいかないだろう、常識的に考えて。

ということで、無言で立ち上がり瓶を持つ俺。

「あっ、あの。お疲れのようですから無理をしなくて大丈夫ですよ？」

「男には、譲れない意地があるのさ……」

「えーっと……」

とりあえず、キルトが何か言いたそうなのを無視してどんどん先へ。
なんか普通に空の瓶を持てました。

と思ったら、水入れてもなんとかなった。さっきほど重く感じなかつた。

これはきっとあれだね、慣れたとかじやなくて男の子の持つ不思議

ぱわーだね。

「ありがとうございます、本当に助かりました」

ついでに満面の笑みを浮かべながらこんなこと言われたら、頑張つてよかつたって思うわ。

その後、一般的な家事一般を手伝いながら（最初失敗しまくりだったけど、最終的には慣れました）その日は普通に終わつた。

Name:リョウ

称号：記憶を失ったへたれ

H P : 2 1 / 4 8

マナ : 0 / 0 (0)

ステータス

Str 4 / 99 (+3)

Age 1 / 99

Dex 4 / 99 (+3)

Vit 3 / 99 (+2)

Int 1 / 99

ユニークスキル

- ・人生の選択

どのような人生を送るか、設定できる。

本人の意思にかかわらず、数値に応じた人生になる。

数字が大きいほど高い。1～5で変動。最大5

シリアルス 5 (固定)
エロス 1 (固定)

- ・真実の目
- 自己及び他人のステータスを、ある程度の範囲で確認することが出来る

スキル

・家事

L
V
4

3 【Hロケ騒】 - 「『おもられた俺がナゾトキアリで想張るお話【N】（後書き）

前書きがおかしかったのを修正

8 / 11 20 : 11

4 【俺——EEEEEEEEE】 それでも俺は、冒険者に憧れる【したいんです】

主人公の地の文での口調がいろいろ変わるのは仕様です。
物語に展開があるのは次回から。

4【俺TUEEEEENE】それでも俺は、冒険者に憧れる【したいんですよ】

それから一日程、同じように水汲みやら家事やらして過ぐした。

初日は、時間がかかりすぎ+下手すぎワロス~~~~~つて感じだつたが、今では立派に主夫になりました。

家事スキルが気付いたら6になつてます。

キルトの家事スキルがどのくらいか知らんが、大体同じくらい動けるようになつてる。

ステはこんな感じ

ステータス（カツコ内は前回比）

Str 6 / 99 (+2)

Agg 1 / 99

Dex 5 / 99 (+1)

Vit 5 / 99 (+2)

Int 1 / 99

Strは一昨日で5になり、昨日6になつた
Dex・Vitも同じく一昨日で5になつたが、昨日は上昇しなかつた。

昨日 - 昨日とやつてゐる内容はほとんど変わらなかつたはず。

これらのことをベースに、この世界のステのシステムを考えてみる。

1・5・6にする為に必要な経験値が多い、あるいは5以降必要経験値が一気に増大する

2・家事で上げられる数値の上限が決まつている

3・家事に慣れた（家事スキルが上がつた）ため、獲得経験値そのものが少くなつている

今ぱつと考え付くのはこんな感じか。

とはいひものの、正直ここから先は現状では判断のしようがない。家事を三日やつた程度で、世界のシステムそのものを理解できるほど優しくは無いだろ？……たぶん。

この世界で生きていこうと、システムを理解することは、眞実の目を持つてゐる俺にとって大きなアドバンテージになるはずだ。人生の選択によってシリアス⁵で固定されている以上、やれることはやつておきたい。

まだ死にたくないし、ナーティボもしてないしな！

「つヨウセ～ん、洗い物終わりましたか～？」

「後ちょっと～」

そんなことを考えながら、私こと冒険者を田指しているはずのリコ
ウは、今日も今日とて家事を頑張っています。
でも、こんな日常もいい……かも……？

「ふつ！ふつ！ふつ！」

ステとスキルが上がったおかげか、今日は家事を終えてもまだ時間
と体力が残っていた。

なので、現在絶賛素振り中である。

素振りと言つてももちろん野球の素振りではなく、剣の素振りだ。
まあ、振つてるのは木の枝なんだが、それは置いておいて……。
なぜかといえばそれはもちろんあれですよ、あれ。

ファンタジーなんだぜ？

剣と魔法の世界なんだぜ？

俺TUEEEEが夢見れるんだぜ？

男子としては俺丁寧でいいのを夢見る見えないだらう、
常識的に考えて……。

そんなわけで、体力と時間がある以上、少しでも強くなる為に努力
してるわけです。

最初は素人があ手本も無しに素振りするとか、よくないんじゃね?
とか思い、ただの筋トレにしようと思つてたんだが、あることに思
い当たつて素振りにした。

あることってのは『スキル』の存在だ。

ここ数日の家事手伝いで、俺には『家事』のスキルがついているこ
とを確認している。

一番最初に確認した時には存在しなかつたにもかかわらず……だ。
しかもこのスキル、レベル制であり、やればやるほど伸びている。
ここで考えられることが一つ。

もしや各種技能はスキルレベルで表され、最初は全て〇であるだけ
なのではないかということだ。

ある種、当たり前と言えば当たり前のかもしない。
ただこれが本当だとすると、筋トレなんて効率が悪いことになる。
なぜならStar、おまけでVict位しか上がりず、戦い方そのもの、
すなわちスキルレベルには影響が出ないからだ。

この世界の計算式が、ステータスよりなのかスキルレベルよりな
かは分からないが、片方が〇なのはさすがにお粗末過ぎる。
ということで、俺は素振りすることにしたのだ。

簡単に言えば、「訓練するなら剣の練習もしたほうがいいよね」これだけなのだががががが。

とまあ、脳内で絶賛一人討論会中の俺だが、そんなことしつつもキチンと素振りはしております。

そしてそんな俺を眺める一人の男……といふかおっさん。

「…………

まあ、ここにいるおっさんなんて一人しかいないので、もちろんラルフさんです。

俺が素振り始めた直後、ちょうどよく狩りから帰ってきたのかばつちり会いました。

ちなみに、手には獲物。採れたてピチピチであらう、ウサギっぽい何かです。

この肉は初めてです。血がついて黒っぽくなつてますがグロイとか言つてられません。

後でさばぐの手伝つて、しつかりとタ'飯にしようと思つます。どんな味なのか、今から楽しみですよ。

さて、素振りを始めて直ぐにおっさんと遭遇した俺。

閑話休題

おっさんは最初、スルーしようとした。

俺も俺で、なんかへたっぴなのを練習してゐ所を見られて、若干気まずかった。

ので、双方スルーのままフローデアウトになるかと思つたんだが……。

おっさんが見てくるんですよ。

通り過ぎながら、首の角度を変えつつ、ずっとひざを見てくるんですよ。

しまいには、首が180度回りました。

そして顔には、『言いたいことがあるけど言つていいものかどうか……』と微妙な優しさと困惑を混ぜ合わせた表情が出ました。そこで強くなろうと決めたからには恥なんて関係ねえ！ついか見られたし今更だろ、常識的に考えて！

という思考になつた俺は聞きました。

「何かアドバイスはありますか？」

「握り方があかしい。脇を締める。足の開き方が変だ。足の踏み込みが……」

ダメだしキタ――――!

なんていうかね、この一瞬でそんなに分かるものなのか……と。つていうか、いぐりスキルレベル〇とはいえ、そんなにダメな部分が多いのかと。

ていうかオッサン容赦ねえなど。

まあ、強くなれりと思つてゐる俺ですから、もちろん素直に聞きましたよ、ええ。

ステータスが平均30くらいにあるんですよ？

狩りとかしてきちゃうんですよ？

つていうか、明らかに人とか殺してそうな顔してゐるんですよ？

そんな人が言う言葉を素直に聞かないとか、考えられないだらう、常識的に考えて。

そして今現在。おっさんも『ハリ』とを言つたのか、俺のことを静かに見守つてやがります。

時々『これで大丈夫？』的な視線を送るんですが、何もリアクションがありません。

大丈夫なのか、大丈夫じゃないのか、あるいは聞いたことくらい一度で覚えろってことなのか、わからないから困ります。

まあ、最初にあれだけ細かく教えてくれてたんだし、多分このままでいいってことなんでしょう。ていうか、そうであつてくれ。

「ふつー…………ヴァー」

おっさんに見られると『プレッシャー』を浴びながらの素振りに体力が限界を向かえたのか、悲鳴と言つてはおかしい音を発しつつ、俺は地面にぶつ倒れました。

少し田を閉じて休憩。

地面の冷たさが気持ちいいです。汚れた服を洗うのは、明日の俺なので問題無し。

「おい」

そうして数分くらいぶつ倒れていたところ、おっさんが声をかけてきました。

目を開けて体を起こし、声のした方を向くと、そこにはおっさんといつの間にか持ってきていた剣。

両刃の西洋刀。

サーベルとかそういうものではなく、なんというか、グレートソードっていう感じ。

日本刀のような美しさも無く、切るといつぱりは裂くといつ感じの使い方になりそうな剣。

古めかしく、とにかくに使われた後はあるものの、なんというか大切にされてたんだなあと思わせる雰囲気を持っている。

何ぞこれ?という感じでおっさんの顔を見上げてみる。

「お前にやひび。剣をやるなら、いつまでも木の棒じゃ格好がつかないだろ?」

そつと渡される。

ずつしりと感じる重みは、木の棒とはまた違つたもの。それと同時に、何か思いのようなものも一緒に受け取つたんじゃないか、そんな気分を味わつた。

「ありがとう、これで戦える」

ニヤリと笑いながら、強がつてみる。

「ふつ、言つてろ」

おっさんも笑みを浮かべながらそつまつと、踵を返して家のほうに向かつ。

「夕食に遅れるなよ」

そう言つて去つていいくおっさんを見ながら、俺はもう一度、心の中で感謝を述べるのだった。

Name・リョウ

称号・記憶を失ったへたれ

H P : 1 0 / 5 6

マナ : 0 / 0 (0)

ステータス

St r 7 / 9 9

A g₁ 2 / 99

D e x 6 / 9

V i t 7 / 99

I n t 1 / 99

ユニークスキル

- ・人生の選択
どのような人生を送るか、設定できる。
本人の意思にかかわらず、数値に応じた人生になる。
- 数字が大きいほど高い。1～5で変動。最大5

シリアルス 5（固定）
エロス 1（固定）

- ・真実の目
自己及び他人のステータスを、ある程度の範囲で確認することが出来る

スキル

・家事 L V 6

• 両手
剣

L
V
5

5 【おつかれさま】 初体験は、おおかまれさでした【速こどり】（前書き）

待つてくれたみんな愛している。

ようやく納得のいく感じになつたので投下。

5【おひめくわ】初体験は、おおかみさんでした【速いんです】

翌日、特に筋肉痛とかも無く当たり前のようの一 日が始まった。朝起きて、飯を食べ、おひさん狩りに行くのを見送り、使った食器を片付ける。

うん、いつも通り『主夫』の朝ですね、わかります。

だがしかし、昨日の俺とは違うのだよ、昨日とは…なぜなら、俺の腰に刺さっている ついてに半分引きずっている昨日おひさんに貰った剣があるからでしてよ奥様！

RPG風にしちゃうと

武器・グレートソード（中古）装備中

的な感じですよ。

よつやくファンタジーって実感がががががが。

と、身に着けた当初は思つてました、ええ、厨一病回路全開だったんで。

でもね、あれなんですよ。

超 邪 魔

でかすきワロス。

腰に挿すより背負いたいわ。

いやまあ、慣れてないから背負つても邪魔なのは変わらないかもしれないが。

とりあえず今日は、男の子の意地といつの何かに後押しされ、このまま腰につけて過ごすけどなー

運がよければDEXとかVITとかSTRとかあがるかもしない

しー。

まさかの魔物とのエイントのあるかもしれないし……。

といつ言い訳を自分にじつは、食器洗いも終わつたのでハイパー水汲みタイム発動。

よーし、おじさん頑張つちや「わー、やけくそ的な意味で。

「それじゃアリョウちゃん、これもしちが」

「おひともよひー。」

最初に作つたはずのキャラが壊れてるような氣もあるが、氣にしないたら気にしない。

俺のキャラの変化なんて、キルトはそんな小さないと感じするよくな子じゃないもんつ！！

そんなどうでもいいことを考えながら水汲みに向かつて森の中を歩いていると、犬の遠吠えのようなものが聞こえてきた。
それを聞いてキルトが足を止めるので、俺も立ち止まる。
直ぐに犬の遠吠えのようなものは数を増していく、森中から聞こえてくるようになつた。
もしやこれつて……

イベントkrkr!-!-!

腰に剣を挿してたのもフラグなんですね分かります。

それを言つなら昨日剣の練習したのもフラグですねわかります。

r
y

「コモウさん、これはウルフの蹄きずです！」

本来はこんな所に入る魔物ぢやないんですけど……。
とにかく、困まれきつてしまつ前に逃げましょ「つー」

とにかく、囮まれさりてしまふ前に逃げましやう!」

そう言つて俺の手を握るキルト。

やね」かすも「口入
www

あ、
—応水瓶は脇に置きました。投げ捨てたりはしてないですよ？

キルトに引っ張られながら走る俺。

キルトは焦っているようだが、俺は正直全然焦つてなかつたりする。
なぜなら実感がまったく沸かないからだ。

魔物とかいう見たこと無いものを怖がれと言われてもいまいちピンと来ないのが一点。

RPG的に考えれば、主人公が覚醒するためのチュートリアル的戦闘なんじゃね？とか考へてゐるのが一点。

ウルフって名前まんますきじゃね?せめてワーワルフとか少しはひねれと言わざる終えない。とか考えてたのが一点。

よつするに、ゲーム脳乙状態だったわけである。

そんなことを俺が考えているうちに、早くも家が見えてきた。そんな長距離だったわけでもないんだが、キルトは息を切らしながら、家が見えてきたことに安堵したのか少し走る速度を落とした。と思つたら、そのまま足を止めた……。

「ん、どしたの？」

家が目と鼻の先にあるのに、急に停止したキルトを不思議に思った俺は声をかける。

しかしキルトはひたすら正面を向けることなく、前方の一点を注視していた。

俺の手を握っている手にも、さつきより力がこもっている。

「……狼つてこんなに大きかつたっけか？」

思わず俺の口から声がこぼれたのはショウがないと思うんだ。キルトの向いている方を見てみると、そこには美しく生えそろえた銀色の体毛を風に走らせている狼だった。

言えることは、とりあえずでかい。

体長とか良くなからんが、普通に四足の状態で高さが俺の腰くらい

まである。

あれだ、『ゴールデンレトリバー』より少し大きいくらいだと感づった
分きつと。

「どうしよう、もうこんなところまで来てるなんて……」

俺がそんな風にウルフのことを観察していると、キルトは心底おびえたように呟いた。

手も震えだしているのが分かる。

いやー、そりや怖いですねー。だってあれですよ、『ゴールデンレトリバー』よりデカイ肉食獣がこっち狙ってるんですよ？

怖いに決まってるだろ？、常識的に考えて。

「んじゃま、俺が相手してくるからその間に隠れててくれや」

そう言いながら、キルトと一緒に手に力をこめる。

僕達男の子。やつぱりどうしようもなく、女の子の前で格好付けるくなるものなんです。

それにほら、俺精神改造受けたのはずだからこのへりこなう怖く

「つ四つわざ、無理しないでトセコト一歩だつてこなに震えてるのよ……」

おうじー もす、震えてるのは俺の手だったよ HAHAHAA！
そりゃーね、怖いですよー！

怒った犬ですら怖いのに、あのサイズの狼が殺しに来るんだぞ！？
怖いに決まってるだろ、常識的に考えて ！

なんて思つてはいることは間違いないんで、じゃこますが、そこはまあ、
ほら、やつぱりね。

男子として、可愛い女の子の盾になるのはやむなしですよ。
格好いいとこ見せたいしな！

「何、武者震いた。それよりもきみと俺の胸姿見ててくれよ？」

「ハジウインク！」

いつもなら俺きめえ~~~~~とか思つ所だが、今は上手く
出来ることを祈りやれるをえない。

俺がびびってるのばれるわけにはいかないしな！

「ダメだよー。ハジウインクさんに何かあつたら私はつ……！」

これなんてエロゲ。会つてたつた数日でフラグですか？
やっぱイケメンだか「……キルトに限つてそれはねーか。
イケメンとか気にしなうだし多分きっと。

他に理由があるかもしけんが、今はそんなこと聞いてる暇は無いか。

これ以上何を言つてもなく、俺はキルトから手を離す。

キルトはまだ何か言つたそうにしていたが、それでも俺の本気を感じ

じ取ったのか、少し離れた。

俺が剣を抜くと、今まで俺達をつかがうようにしていたウルフが攻撃意識を高めたように思えた。

こんなタイミングで剣持つてたり、ウルフが俺を待つてたりと、さすがご都合主義の異世界だと思う。

だからどうせなら、この結果までご都合主義になってくれないかと思いつながら、ウルフに向かつて剣を向ける。

シチュエーションは完璧。

昔はこんな展開を何度夢に見たことか。
夢は夢のまま現実に押しつぶされるものなのか、
それとも夢は現実になるものなのか、その最初の関門が今ここで始まる。

さあ、主人公を始めよう

俺に向かって走り来るウルフに意識を向けながら、俺はそんなことを考えた。

6【主人公】オレとあの子と魔物の襲撃【始動】

ウルフが攻撃を仕掛けてくる。

俺が剣で受ける。

仕切りなおす。

ウルフが攻撃を仕掛けてくる。

剣で何とか押し返す。

仕切りなおす。

言葉にすれば、これだけ。

俺はそれを、ただひたすらに続けていた。

何回受けたかも、何分経ったかも、今の俺にはわからない。

他の事を考える暇も無いほど、俺はそつやつてウルフと戦っていた。

ウルフと対峙し初撃を奇跡的に弾くことが出来た俺は、今の俺では
ウルフには勝てないということを悟った。
まず、速さが段違いだ。

ウルフと俺の体の間に剣を構え、体当たりしてきたウルフになんとか剣をぶつける、俺にできるのはそれぐらいしかないほど速さに違
いがある。

つまりここは、攻撃なんてしようが無いのだ。

攻撃をしようと動きを変えるならば、次の瞬間に直撃を受けていて
もおかしくは無い。

そしてまた、重さが違う。

ウルフの体重がどの程度かはわからないが、その攻撃はウルフの全体重をかけたものだ。

威力＝重さ×速さ　とかだつただろうか。まあ細かい式とかはどうでもいい。

ただ言えることは、少しでも気を抜けば例え剣で受けても吹き飛ばされるであろうとこりうことだらう。

さて、以上的一点から受け止められる解は何か。

答えは簡単。『俺は受けに回ることしかできない』

それも、『受けに回れば間違いなく受けることができる』ではなく、『受けに回れば受けができるかもしれない』とこりうレベルだ

が。

とすればだ。受けに回る以上ウルフにダメージを取ることもできず、逆に俺のHPは削られていくだけになるだらう。

常識的に考えれば明らかにジリ貧の状態。

本来ならば、俺はわずかな可能性に賭けてでもウルフを倒すべく行動するべきなのかもしれない。

何も行動できなくなるほど体力を削られる前に、体力が残っているうちに何か仕掛けるべきなのかもしれない。

だけど、俺はあえてそれをしない。

守って、守って、守って、守る。そしてただひたすらに時間を稼ぐつもりでいる。

何故か。答えは簡単だ。時間さえ稼げば、おっさんが戻ってくるからだ。

一応問題点として、おっさんですら勝てない可能性があるかもしれないというものもあるが、あのおっさんがウルフなんぞに負ける姿を思い浮かべることなんてできません。

名付けるならば、『俺が無理なら、おっさんに倒してもうればいいじゃない』作戦！

そんなことを一瞬のうちに考えて、俺は再び襲つてくるウルフの一

撃に意識を集中した。

長い長い戦いが続く。

何分も経つたのか、それともまだ一分も時間を稼げていないのか。次々と増えていく傷、削られしていく俺のＨＰ。

飛び掛ってくるウルフの爪を弾く。その際に、また傷が増える。しかしそんなことに気を取られている暇は無い。

ウルフは着地と同時に再びこちらに飛び掛ってくる。

今度は口を大きくあけ、牙からよだれをたらしながら、俺に噛み付こうと飛び掛ってくる。

俺はその頭に向けて正面から剣を叩きつける。

とても重い感覚。そして、とても硬い感覚。

剣はウルフの皮膚を切り裂くことも無く、まるで棒をぶつけたかのごとく押し戻される。

しかしウルフにも多少のダメージは入ったのか、仕切り直しするかのごとく俺から距離を取る。

ウルフが距離を取ったおかげで少し心に余裕ができる俺は、あることに気が付いた。

直前に一連の流れで、俺はウルフに『剣を叩きつけて』いる。

そう、剣を合わせて『いるだけじゃない』、叩きつけることができるのであるのだ。

戦闘開始当初は、剣を合わせるのがぎりぎりだったにもかかわらず

……だ。

もしかして、倒せるんじゃないかな？

そんな思いが頭をよぎる。

ウルフは、そんな俺の思考を中断せむかのように再び俺に向かって飛び掛ってきた。

そして俺には、そのウルフの攻撃が見えていた。

見える！

そつ思いながら、剣をぶつけて対応する。

俺の余裕の動作に警戒したのか、ウルフは再び距離を取った。
そこで俺は再び考える。

速度的には問題無い。

問題はダメージが通るかどうかだ。

俺の剣ではウルフの皮膚に傷をつけることができない。
ならどうするか。考えるまでも無い、皮膚が硬いなら軟らかい所を狙えばいい。

腹、狙いようが無い。目玉、的が小さすぎる。鼻、同じく小さい。口の中……ウルフが大口を開けたときに限れば可能。どのように？飛び掛ってくるウルフにあわせる以上、『突き』の一択。なら俺の取るべき手段は……。

剣を持つ右半身を弓のように引き絞る。

左手を剣先に添えるように前に出し、狙いを定める。

足は軽く曲げて前後に開く。

さあ、準備は整った。後はウルフを倒すだけだ。

ウルフは俺の構えに戸惑ったか、はたまた俺の気配の変化に反応したか、先程よりもしっかりと助走をつける様に後ろ足を動かしている。

そして、一瞬の静寂。

弾けるよつに飛び掛ってくるウルフ。

俺はその開かれた口に向かって、ただ一つの突きを放つ！

突き抜ける肉の感触。

飛び散る血の暖がさ

そして聞こえる、生命の断末魔

俺の目の前で光と化していくウルフを見て、俺は勝利の雄たけびを挙げた。

戦闘を終えた俺は、とりあえずウルフが消滅した後に落ちていた赤い石みたいのを拾つておいた。

魔物から出た赤い石とか、どう考へてもお金になる何かです、本当にありがとうございました。

「フヨウさんっ！大丈夫ですかっ！？」

隠れて見てたんであります、キルトが大声を上げながら俺の所に走つてきた。

「大丈夫だ、問題無い」

「そんなわけあるはずないじゃ無いですかっ！」

「ん…心配してくれる美少女つていいよね！」

「…そんなわけないと思つてたら聞くなよとか、そんな黒いこと考えてないですよ？」

「全身そんな血だらけになつて…無茶しすぎですっ！」

「いやいやおせうせん、これにはウルフの血も混ざつてしましてですね」

「ウルフの血は一緒に光となつて消えますっ！」

な、なんだつてー！

つーことは、え、何、この全身をほとんど余すことなく覆つちゃつてるような血が、全て俺のものだと？

H A H A H A 、何を言つてるんだいお嬢さん。そんな状態だつたら、

俺既に死んでるだろ、常識的に考えて。
とはいって、一応確認しておこうつ、うん。

「……本当に？」

「もちろんです！いくら私がこまめに回復していたからといって、
血液までそう簡単には増えませんよ！」

「……こまめに回復していた？」

「あれ、知りませんでしたつけ。私こう見えても、回復魔法の使い
手ですよ」

つまりあれですか、自分一人の力で魔物倒したぜひやつはーー！って
思つてたら、回復の支援付きだったわけですね、わかります。
あ、テンション下がつてきた……。

あれ、ついでに痛みが復活してきた！！！

体中痛くなってきたでござる！ギブミー回復魔法！！！！

「あっ、ココウセキ、あれラルフさんじやありませんか？」

そんなこんなで、キルトに今一度回復魔法をかけてもらひました
ちょうどそのタイミングで、おっさんが現れた。

俺の姿を見て一瞬ぎょっとしていただが、キルトと一緒に手を
振つてやるとなんかまあ安心したようだつた。
俺の体まだ痛いままだけどね！

そうしておっさんは手を振り返そうとして、もう一度固まつた。

今度は、目線が俺を向いているようで少しづれている。
俺のそな更に奥を見ているような……。

「！」

おっさんが何か叫びつつ、こちらに向かって走り始めた。

俺は後ろを振り返る。

そこには、ウルフを更に巨大化したようなやつで、口にはなんかエネルギーみたいのが溜まっています。

その丞先は俺というか、キルトっぽい。

大きな魔物 + 口にエネルギー + こっちに向いている = なんかエネルギーの塊みたいなのが飛んでくる

エネルギーの塊それ自体は俺とキルト両方飲み込をほど大きくな
い、それだけ確認した俺はキルトを突き飛ばしていた。

そこに手加減などしていなければ瞬く間に無くなってしまう、一言の如きは全くないが、勿

次いで襲つてくる激痛。

痛みの基に目を向ければ、何処にこれだけ残っていたのかと思う位に大量の血液が流れていった。

そして俺の口からも……。

全ての動きをスローに感じながら、俺は地面に倒れる。

どうせなら二ノリの城食らう前に不口になれ。どうしようもないことを考へながら。

俺の後ろを ものすごい速度でおっさんか通り過ぎていく
キルトは俺を見て、慌てて駆け寄ってくる。

何かを大声で叫んでいる。

きつと俺を心配してくれているんだねうなと思うと、その声を聞く

手を伸ばそうとするが、手が動かなかつた。

ならばせめてその顔だけでも見ておいたと黙つても、今度はまぶたが勝手に下がつていった。

これで終わりか。我ながら

三木一経相手の方を知り異性生活力

全てを諦め、
体全体の力を抜く。

本が熱を持ったのが、余々この本が熱くなつて一々。

死ぬ時は体が冷えていくと思っていたので、新発見だった。

熱
く

熱
く

あつ

あまりの熱さに叫んでしまったわけだが、俺にはまだそんな力が残つてるのかしら?

目を開けてみる。普通にあいた。

手をわきわきさせてみる。Hロイ具合に手が動いた。

首を傾けてみる。そこには、なんかものすごい光を放つていてるキルトがいた。

え、何これ？さつき言つてた回復魔法？何これ死ぬ寸前から復活とか万能すぎじゃね？

何、これがこの世界の「テフオ」な回復とかだつたりするのか！？いやいや馬鹿な、こんな馬鹿みたいな回復「テフオ」とか問題しかない、多分きっと。

つまり、キルトが特別なんだよ！なんだからってー！

まあそうだよね、当たり前だよね、こんな所であんなおひさんと一緒に住んでる時点で気付いてしかるべきだったわ。

よし、決定！

そうして一人テンパリながらキルトを見ていると、なんか変なのが見えてきたでござる。

キルトに降りる様折り重なつていてるそれは、天使の格好をしている。うん、ここに来る前に見た記憶あるわ、そのいやに意味ありげな笑顔含めてなつ！

そして、俺の意識今度こそ落ちていった。

6【主人公】オレとあの子と魔物の襲撃【始動】（後書き）

次回第一部完

7 【今まだが】 ハビ、リードネタばかり【プロローグ】（前書き）

今回で第一部完だと書いたな。あれは嘘だ！

すいません、なんか無駄に長くなりました。

世界の説明回です。

7【今までが】 つゞ、リリヤネタばらしー【プロローグ】

「知らない天井……じゃねーな、リリー」

この世界についてから、既に何回か見てている天井を見上げながら田を覚ます。

どうやら俺はぶつ倒れて、運び込まれたらしく。

「田が覚めましたか、『主人様』

ん、何処からともなく声が聞こえてくるよ？

といふか、凄く近くのよつた気がするんだよ？

顔を横に向けると、一緒にベッドに寝ている美少女がいるんですが何これ怖い。いや嬉しい。

とりあえず落ち着け俺。フリーーズした頭に再起動！

・
・
・
・
・

OK、再起動終了！

とりあえず、抱きついとくが、状況的に考えて。

10分くらい少女の柔肌堪能したで『Jやる。

寝起きの俺はこれで満足である。さすが紳士、ただし変態と言ひつつ今

の。

「もう終わりですか、ご主人様？」

「さすがに状況説明が欲しいで」「やれる」

リアルで『しゃるとか言つてしまつた。後悔はしていない。
つーか、キャラ作るのめんどくね？
もつね、脳内の会話とかそのままの感じで喋つていよいよね？」

「もちろんかまいませんよ」

「思考読むのやめれwww」

キルトの格好だけど中身ルナですよね、あなた。
ご主人様とか呼ぶのルナしかいねーし。

「んじゃ、とりあえずネタばらしうつーす。

長くなりそうなら3行で」

「ご主人様の深層意識を読み取つて、わざと超えられる程度の試練
を入れてみた。

初期値は低いけど、超成長つてのもいいよねー！っていう深層意識
を（「う

）の世界の神様である私に言えば今後なんでもできます

「なんとなく分かつたけど分かりづれえw」

その後丁寧に説明させて見るとこんな感じだった。

- ・俺が異世界で俺TUEEEEしたいと言つていた。
- ・だけど心中を覗いた時、弱い主人公が何とか敵を倒すつていうのもいいよね！って思つてるのを発見。
- ・両方を満たす条件を探す。
- ・最低数値スタートにして、弱いうちに願望を叶えさせて、それ以降で俺TUEEEEさせようつていうことに。
- ・危機感とかないと面白くないだろつし、ルナに騙されたと思わせておいた。
- ・そしてネタばらし（今こい）

つまりこれから俺TUEEEEできるわけですね、わかります。

ステが異様に伸びるのも、ここに解があつたのね。

「そういうや、ステつてどのくらいどんくらい凄いの？数値だけだといまいちわからんのだが」

「そうですね、5が一般人、平均10で駆け出し冒険者、平均30位で一流冒険者ですね。平均50を超えてるのは大陸で数人です。ちなみに、ご主人様の場合は、上げようと思えば1年以内に大陸最強になれますね」

「リアルチートw。だがそれがいい」

「称号やスキルについても説明しますか？」

「よろしく。主に俺TOMEの為に」

称号とかユニークスキルとか、あるのは分かるが効果がいまいちわからんかったしな。
知つておく必要はあるだろ、多分きっと。

「まずはステータスを確認していただけますか？」

「おけ。スキル発動つと」

Name:リヨウ

称号：創造神に寵愛されし者

- (真なる勇者)
- (冒険者の心得)
- (施政者の心得)
- (王の心得)
- (神の化身)
- (H口の化身)

マナ：0／0（0）

ステータス

Str 15／99

Ag1 13／99

Dex 12／99

Vit 18／99

Int 1／99

ユニークスキル

- ・人生の選択（固定解除！）
どのような人生を送るか、設定できる。
本人の意思にかかるらず、数値に応じた人生になる。
数字が大きいほど高い。1～5で変動。最大5

シリアルス 1

エロス 3

- ・神の眼（真実の目からランクアップ！）
神の眼を持ち、全てを視認することが出来る能力。

自己及び他人の名前・称号・ステータス・ユニークスキル・ス kill を全て確認することができる。

アイテムなどの名前、性能を把握することができる。

- ・主神ルナの寵愛（NEW!）

主神ルナの絶対的な愛を受けている

各種ステータス・スキルの上昇率の増加

特殊ユニークスキルの獲得

特殊称号の獲得

主神ルナの呼び出しが可能

- ・魅惑 チャーム（NEW!）

異性に対する圧倒的な魅力を發揮する。

好感度上昇時上げ幅が大きくなる

好感度下降時下げ幅が小さくなる（まつたく下がらなくなるわけでは無い）

- ・擬態（NEW!）

自身を擬態し、他者を欺く

実際の称号意外の称号を対外的に付けることができる。

同様に、対外的にステータスをいじることができる。

- ・性魔術（NEW!）

エロゲー的主人公の必須スキル！

私はこれ無しでも落されました！

行為相手のユニークスキルのコピーが可能

行為相手に自分の持つユニークスキルをコピーすることが可能

行為相手のステータス・スキルの成長率が上がる。

性行為に伴う快感が、双方とも増加

スキル

・ 家事 L V 4

・ 両手剣 L V 15

色々増えすぎワロタ WWWWWWW

ステとかあがりすぎだろ WWWWWWW

いつの間にか一般冒険者レベルかよ WWWWW
性魔術のとこなんかおかしいぞ WWWWWWWWW
そしてあれか、ネタばれしたから色々解放されたのか WWW

「それでは、細かい説明をさせていただきますね。

称号はその人の現在の状況を最もよく表しているものです。

商人なら商人。旅人なら旅人といったようにそのまま表示されます。

ただ、旅人であつても何者かに追われていたりすると、追われている旅人といったように、称号に若干の変化が起こります

「俺の称号はつと……創造神に寵愛されし者か」

「改めて口に出されると、恥ずかしいですね……」

顔を赤らめて、少しばにかむルナ。何これ可愛い。

場所が場所だが我慢だ、説明が終わるまで我慢だ……我慢なんだよー！

「え、えーっと続けますね。

先ほど、称号はその人の現在の状況を最もよく表しているといいましたが、いくつか例外があります。

例えばご主人様がお持ちの『真なる勇者』です。

これをセットした場合、状況が称号に合わせようとなります。言い換えれば、勇者になるようにイベントが多発するというわけですね。

「ご主人様がお持ちの他の称号もほぼそちらのタイプです」

「つまり、俺はどのような主人公になるか自分で選べると言つわける。

……ちなみにエロスが多いのはどれだ？」

「鉄板でエロの化身ですね。

ただ、この称号はエロスしか無いようなものなので、ある意味物足りなくなるかもしれません。

主人公しながらエロスとなると、お勧めは冒険者心得でしょうか。

エロスもそれなりにありますし、冒険者として様々なイベントが起きますから。

もちろん俺TUEEEEもできますし

ふむ、とりあえず冒険者の心得が第一候補だな。

エロスばかりだと面白くないだろうし、英雄とか王とかメンドクセ。冒険者で好きに生きるつていいよね！

「ちなみにですが、勇者の称号を持つ者は他にもいます。ですので、ご主人様が『真なる勇者』を付けない場合、別に勇者の称号を持つ者が勇者として活躍することになります」

「勇者の称号を持つるものがある程度活躍している状態で、俺が『真なる勇者』付けたらどうなるん？」

「付け替えた後から、ご主人様こそが勇者に相応しいとみんな思えるようなイベントが乱発しますね」

「旧勇者は死んだりしませんが、徐々に勇者では無くなっています」

創造神マジぱねえ。

何でもかんでも俺がメインなんですね、わかります。

「続いて、ステータスは先ほど説明しましたし問題ありませんね。ユニークスキルについて説明させていただきます。

これは、各人が一人に付き一つ持つことができる特殊スキルです。ご主人様は特別ですので、いくつもお持ちですけどね。

様々な種類があり、ご主人様の様な特殊なスキルから、単純に特定ステータスの数値が倍になるようなものまで様々です。

入手方法も様々で、生まれた時から持っている者、特定の職業を極めて初めて手に入れる者、神に祈ることで簡単に手に入れる者まで様々ですね」

ふむ、とすると性魔術無双になる予感。

「ご都合主義的にチャームもあるしな。

ただ問題は、男がいいユニークスキル持つてた時なんだが……。

「ご主人様の周辺に現れる人物で、欲しくなるようなユニークスキルを持つているのは女性の方にしかなりませんので問題ありませんよ」

さすがルナ、痒い所に手が届く！

「最後にスキルについてですが、これは単純に熟練度ですね。

慣れればなれるだけ、上手くなれば上手くなるだけあがっていきます。

これも掃除洗濯から始まって、農耕や商売、両手剣から盾まで様々ですね。

ステータスと同様、5で一般人程度。50で国一番と云う所でしょうか

「それが全部表示されんの？

さすがに多すぎて面倒じゃね？」

「その点については問題ありません。

基本的には称号に関するスキルか、特に秀でているスキルしか見れないように設定してありますから。

もちろん見ようと願えば全て見ることは可能ですが、お勧めは

しませんよ

「だねえ。場合によつては情報多すぎて脳みそ沸騰しかねん。
ああそうだ、擬態つてヨニークスキルがあるところを見ると、他の
人もステとか確認できるんでしょう？」

その場合どの辺まで見れるの？」

「そうですね、最低ランクの『真実の目』で名前と称号まで。
一つランクが上の『精靈の瞳』で名前と称号にHPとマナ、後ス
テータスが確認できます。

これらのスキルを持つていない人は自分のHPやステータスです
ら確認できません。

唯一確認できるのが、ヨニークスキルですね。これは教会で確認
できるようになっていますので」

「俺の成長具合から考えて、ある程度静かに暮らすなら『擬態』は
必須つて訳ね。把握した」

「とりあえず、今説明しておくべきことは以上ですね。
後は生活をしながらでも、徐々に知つていったほうが異世界物
として面白いと思いますので」

「まあルナがそういうならそんなんだろうな。ありがと、助かった
よ」

感謝の念を込めて、頭をなでなでしてみる。
真っ赤になつて小さくなつてゐるで、じざる。
可愛すぎて困る。

「あの…………でしたら……」「龍愛を賜りたく…………」

凄く小さい声で、とても恥ずかしそうに言つるナ。
もうね、辛抱たまらんですたい！

「今夜は寝かさないぜH A H A H A !」

「まだ朝ですよ…………」

こうして俺は、発言に責任を持つて翌朝まで頑張ったのだった。
HPが高いつていいね！！

7 【今まだが】 つむ、うるさくねタボウリ。【プロローグ】（後書き）

次回いそきつと第一部完！
しかし設定つて考え始めると無駄いじりつけいつよなー。
困ったもんだ HAHAH

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5878m/>

【最強系（笑）】俺の異世界冒険譚【最低系（笑）】

2011年5月27日17時31分発行